

主基斎田跡とお田植え祭り

日本の天皇の即位に伴う儀式は多くあり、込み入っています。それらの手続きのなかで最も重要なものに大嘗祭があります。重要な神道の感謝儀礼で、天皇は新たに収穫された米その他の産物を祖先神に捧げ、それによって新帝が神々に愛されるようにするものです。7世紀以来、大嘗祭で使用する米は、国の東部と西部から1つずつ、計2つの田で収穫されたものとなっています。収穫する田をどれにするかは、亀卜の儀式で決定されます。この儀式では、それぞれの田が都から見て大まかにどの方向になければならないかが示されます。大正天皇（1879－1926年）の即位に際して、1914年に卜骨が示したのは香川県でした。現綾川町の田が、神聖なる米の西日本の供給元として選定されました。

天皇のための稲は、1915年11月に執り行われる大嘗祭に備えて、同年5月に植えられました。地元の人たちがカラフルな衣装を身にまもって踊り、その儀式用に作られた歌を歌う、手の込んだ田植えの儀式が、1986年以来毎年6月に綾川町で再現されています。この主基斎田まつりは1915年に大嘗祭の稲を栽培した水田の隣りで実施され、1世紀以上前に皇室が綾川に授けてくださった大きな名誉を記念して設立された学校の生徒を含む、地元の学童が行います。その水田から徒歩15分ぐらいの場所にある主基斎田記念館では、1914年と1915年のイベントを総合的に説明しています。